

『運河と閘門 ～水の道を支えたテクノロジー～』

企画グループ サブリーダー 後藤勝洋

川の流れと浮力を利用した舟運は、洋の東西を問わず人類が最初に手にした交通・輸送手段である。水は高みから低きに流れる。流れの勾配が急であれば流速は早くなり舟運には適さない。川を横断し堰を設ければ上流部の流速は抑えられるが、不連続となるうえ水位差が生じる。この問題を解決したのが閘門である。閘門の詳細については本文に譲るが、内陸部の舟運を根底で支える技術であり、水の持つ力と性質を巧みに利用し舟を上下させる、シンプルでまことに魅力的な施設である。



荒川ロックゲート
(荒川)

江戸時代の繁栄を根底で支え、近代化への大きな足掛かりとなったのは、治水、利水面で整備された各地の河川と地先の用水路を利用した舟運システムの構築、および、河村瑞賢により開発された東回り、西回り廻船による全国的なネットワークであった。維新後、明治政府のとった運輸政策の基本は鉄道であった。結果舟運の衰退とともに、全国各地で栄えた湊や河岸（かし）も廃れ、代わって鉄道駅がまちの中核となっていった。さらに追い打ちをかけたのがモータリゼーションの到来である。まちは道路に顔を向け、舟影のなくなった川に背を向けた。対岸のまちと人との触れ合いを乗せて行き来した渡し船も道路橋にとって代わった。



船頭平閘門
(木曾川)

こうした時代の流れの中で、今日に至るも活躍している閘門、遺構として残されている閘門、あるいはかつて存在していた閘門の跡など、先人の残した貴重な土木構造物を調査、記録し、後世に残しておくことは大切なことと考え、2007年4月大同工業大学名誉教授久保田稔氏の呼びかけで、「日本の閘門を記録する会」が発足された。同会が2年にわたり調

査・記録した閘門の数は163に及ぶ。

本書は、それらの調査・記録の結果から、運河・閘門に関するエッセイ、コラムを作成・編集したものである。

かつて地域社会の経済活動に貢献してきた閘門は、地域河川文化を次世代に引き継ぐ施設として、さらには災害時における輸送の支援施設として大切な役割を担っている。本書は、先人の築いた閘門を単なる遺跡、遺構として捉えるだけでなく、将来に向け地域発展の資産として活用される端緒となることを願うものである。

(本書 まえがき (三浦裕二) より引用)

なお、本書は、(財)日本宝くじ協会の普及宣伝事業の助成を受け作成したものである。



毛馬閘門 (淀川)

◇構成

- 序 章 運河・閘門の基礎知識
- 第1章 北海道の閘門
- 第2章 東北の閘門
- 第3章 北陸の閘門
- 第4章 関東の閘門
- 第5章 中部の閘門
- 第6章 近畿の閘門
- 第7章 中国・四国の閘門
- 第8章 九州の閘門
- 終 章 これからの河川舟運と閘門

